県立高等学校における総合的な学習の時間についての一考察
－地域性を生かしたＳ校の事例を中心として－

河村　貞男　　永田　秀隆

キーワード ： 総合的な学習の時間，七ヶ宿概論（歴史的分野，野外活動的分野など），
地域性，評価，振り返りカード

A Study of comprehensive studies in Japanese prefectural high school
－ A case study of S high school's activities using of regional characteristics －

Sadao Kawamura　　Hidetaka Nagata

Abstract

1 . Objects
The subject of this study is "comprehensive studies" that is in the course of study for senior high school. We set "S" high school that has regional characteristics and distinctive characters as a model high school in this study and practice the class. On this occasion, we study how to help students in the class and reconsider the teaching method form students' self evaluations and reports. Finally, we would like to consider the best teaching method throughout practicing this class.

We studied this object from four viewpoints

1) We studied this theme continuously on the basis of practical classes in this year.
2) From the practical classes of hours for comprehensive studies, we surveyed students' interests and concerns for their classes, then we arranged the unit, and finally we found the best teaching method.
3) We chose four classes from the teaching program for this year.
4) Before every activity we told students the importance of communication with local residents. Then we guided them in trying to do this activity. And we would like them to connect with self evaluation.

2 .Method: The literature and case studies we focused on reports from students, as well.

(1) Investigative tool: reality check, feedback card and reports
(2) Surveying period: from June to November, 2007

3 .Respondents to the survey

(1) Teaching students about the survey of Shichikashuku town in S high school
Comprising: 7 students
Second year students (four boys), Third year students (a boy, two girls)

4 . Conclusion

(1) The feedback card leads students' evaluation for some view points and it was useful to find

difference of interests and concerns between teachers and students.

(2) When students wrote the feedback cards, we showed them recorded class scene video. That was very effective ways for writing it. In the activity students have done aggressively, they wrote a lot of reports.

(3) In practical activities 1 to 3, we target communication with local residents. Especially, we got satisfiable accomplishment and it led each self evaluation.

(4) From feedback cards after practicing activity 1, we found that our helping hands with them didn' t necessary lead their interests and concerns.

Key word: comprehensive studies class, survey of Shichikashuku town (history, geography, custom etc...), regional characteristics , evaluation and feedback card

1．はじめに

日本教育の柱である学習指導要領の改訂は約 10 年に一度見直されてきた．その理由の一つとして，子どもを取りまく環境の変化や社会情勢などが挙げられる．

高度経済成長と共に情報化，国際化の時代に入り，教育改革は 10 年に一度見直しという様相を欠きはじめた．

近年，情報化と同じ勢いで今日の子どもを取りまく環境の悪化は急速に変化し，犯罪の低年齢化やいじめ，自殺，不登校問題など課題が山積していった．

これらの問題に焦点を当て，学習指導要領に関して紐解いてみると，現行の学習指導要領（高等学校学習指導要領）について言えば平成 11 年３月に全面的な改訂を行い，今日まで３度一部改正が行われた．

中野[13]は学習指導要領の歴史的変遷について，表１に示す通り第１次から第６次に分類した．

表1　学習指導要領の歴史的変遷

分類/年号	変　遷	具体的内容
第1次(1951)	教育の生活化	経験主義の問題解決学習
第2次(1958)	教育の系統化	系統学習への転換，基礎学力の充実
第3次(1968)	教育の科学化	科学的な概念と能力の育成
第4次(1977)	教育の人間化	学校生活におけるゆとりと充実
第5次(1989)	教育の個性化	新しい学力観に基づく個性の重視
第6次(1998)	教育の総合化	特色ある学校づくり，総合的な学習の時間の創設

ここで，注目すべき点は，第４次「教育の人間化」と第６次「教育の総合化」である．

志水[15]によると，1970 年代後半の第４次改訂において，受験戦争の激化や学歴社会の弊害を背景に「ゆとり」をスローガンにした「教育の人間化」が進められた．

一方，第６次改訂においては，1998 年に告示され 2002 年度から各学校段階に導入された現行の学習指導要領は，「生きる力」をキーコンセプトに，「総合的な学習の時間」を推進し，授業の在り方，子どもたちの学びのあり方の抜本的な質的転換である，と記している．

現行の学習指導要領は平成 10 年 12 月 14 日に幼稚園，小学校及び中学校，平成 11 年３月 29 日に高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校幼稚部，小学部・中学部・高等部の内容が告示され，平成 14 年４月より順次実施された．高等学校においては，平成 15 年度から順次学年進行で実施された．

本研究は平成 15 年度から完全実施された高等学校における「総合的な学習の時間」について検討する．

2．高等学校における「総合的な学習の時間」創設の経緯

今回の改訂においては，高等学校の教育課程に新たに「総合的な学習の時間」を創設[10]し，各学校が地域や学校，生徒の実態に応じ，横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこととしている．

総合的な学習の時間については，これからの教育の在り方として「ゆとりの中で〔生きる力〕をはぐくむ」との方向性を示した平成８年７月の中央教育審議会「２１世紀を展望した我が国の教育のあり方について」（第一次答申）において創設が提言された．

１）総合的な学習の時間のねらい

・各学校の創意工夫を生かし横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心に基づく学習などを通じて，自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てること．

・情報の集め方，調べ方，まとめ方，報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付ける

こと.

・問題の解決や探究活動に主体的，創造的に取り組む態度を育成すること.

・自己の生き方についての自覚を深めること.

※これらを通じて，「各教科等それぞれで身に付けられた知識や技能などが相互に関連付けられ，深められ児童生徒の中で総合的に働くようになる」ことを目指している.

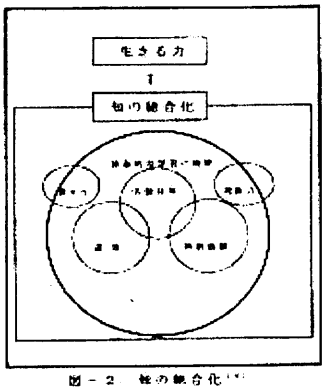
表2　総合的な学習の時間の時間数・単位数[5]

NO	学校別	総合的な学習の時間の時間数・単位数
①	小学校	3年生以上から週当たり3時間程度
②	中学校	週当たり2～4時間程度
③	高等学校	卒業までに105ないし210単位時間配当 これに付与できる単位数3ないし6単位時間

(※)　1単位時間を50分として計算する.

2）総合的な学習の時間の各教科との関連

総合的な学習の時間は，各教科の教育と深くかかわっており，各教科のよさをさらに伸ばし，その短所を補うことが，総合的な学習の時間に求められている.



図－2　知の総合化[7]

よさを伸ばすとは，各教科の目標や内容が総合的な学習の時間のなかで確認されたり，不十分であったところが補充されたりすることである.

また，短所を補うということは，各教科のもつ形式性や所定の枠組みを乗り越えることが，総合的な学習の時間で可能になることである.

総合的な学習の時間にあって，知の総合化[8]が求められていることは，教科の知識・理解や能力などを生活の知恵に転化することができるということなのである.

このような意味において総合的な学習の時間に期待されていることは，各教科の短所を補うことなのである.

3）総合的な学習の時間の評価

教師は何らかの評価をしながら児童生徒を指導している．そして，児童生徒の評価を教師自身の指導の評価として受け止め，次の指導に生かそうとするのである．このとき日常的な指導における「指導と評価の一本化」[8]が図られている．総合的な学習においても同様である.

総合的な学習の時間において求められる思考力や判断力といった高次の能力の評価は難しいものである．高次能力を評価するためには，ある一定の標準的な基準を設定し，その基準と児童生徒の思考や活動と比較し評価する方法が求められる.

さらに，総合的な学習の時間では，目標に準拠した評価と児童生徒一人一人のよい点や可能性，進歩の状況などを評価するための個人内評価とを併用することが求められるのである.

（1）評価の観点

現行の指導要録[4]における各教科の評価観点としては，基本的に次の4つが示されている.

NO	評　価　観　点
1	関心・意欲・態度
2	思考・判断
3	技能・表現
4	知識・理解

3．先行研究

「地域」をテーマに取り組む小学校と高等学校の研究の取り組みについて下記に記す.

1）「地域」をテーマに取り組む小学校での研究事例

千葉[11]（柴田町立F小学校）らは「総合的な学習の時間」の研究において，「地域」をテーマに取り組んでいる.

研究論文主題

「自ら考え，見通しをもって学ぶ児童を育てる指導の一試み　－他地域の特色が感じられる体験的な活動を生かした問題解決的な学習を通して－」

この研究実践では，児童の生活圏を中心とした地域の特色や環境などを調べる学習を通して「総合的な学習の時間」のねらいに迫った．そのねらいは，他地域を調べる学習を通して，自分の住む地域の特色がより一層鮮明になり，地域を見つめ直す学習につなげることにあった.

具体的には，学習段階において自分達が住んでいる柴田町を取りあげ「自分の地域の特色は何だろう」という調べ学習から発展し，他地域の特色に目を向けた.

2）「地域」をテーマに取り組む高等学校の研究事例

また，須藤[16]は宮城県W高等学校において次の研究に取り組んだ.

研究論文主題

『地域と連携を深める「総合的な学習の時間」の授業－地域社会とのつながりを図るキャリア教育の実際－』

この研究では，平成17年度から総合的な学習の時間を「桜風（おうふう）タイム」と称してスタートさせ，計画の段階から3年間を見越した発展的な内容で構成し，1・2学年では「地域社会」を学習内容に組み込み「社会」とのつながりや，将来への接続を意識しながら授業を展開した.

特に，進路指導を中心とし地域社会とのつながりを図りながらキャリア教育[注1)]を推進していった．

[注1)] キャリア教育：児童生徒の自立を支援しながら学習活動を進めていく教育の理念を示すものである．「キャリア」とは経験を基に身に付けていく考え方や力の累積である．

3）本研究との関連性について

先行研究1）では，児童の視点を一度他の地域の特色に目を向けさせて，自分の住む地域の特色を見つめ直す学習につなげる手法を用い総合的な学習の時間を膨らませていった．また，先行研究2）では進路指導を中心とし地域社会とのつながりを図りながらキャリア教育を推進し，見通しを持った総合的な学習の時間の系統性と他領域の関連を確立させた．これらの先行研究を踏まえ，S校の「総合的な学習の時間」の授業実践内容や方向性について試行錯誤をしながら研究を進めることにした．

4．研究目的

本研究は，高等学校のカリキュラムの中の「総合的な学習の時間」を研究の対象とする．具体的には，モデルとなる高等学校として，地域性と特色のある学校であるS校を事例とし，「総合的な学習の時間」の授業を実践する．その際，教師側の働き掛けや生徒の評価を振り返りカードやレポート等を通して考察することにより，「総合的な学習の時間」における授業の指導法について考察することが本研究の目的である．

5．研究方法

1）文献研究

学習指導要領及び学習指導要領解説や国立教育政策研究所が発行している著書[2)]，「総合的な学習の時間」の研究収録，「地域」をテーマに取り組む先行研究．

2）事例研究

モデル校は，へき地，山間部という立地条件もあり，素晴らしい自然環境に恵まれた特色のある学校である．学校が立地する七ヶ宿町は，かつて江戸時代に参勤交代の街道と宿場町として栄えた歴史と文化の宝庫である．

生徒達は，「総合的な学習の時間」でこれらを調べ，体験しながら，興味・関心を持ち豊かな創造性へと発展していく．つまり，自ら学び，自ら考える主体的な学習能力，問題を解決する能力を高めることをねらいとする．

〈事例研究の手順〉

①年間指導計画から体験を伴う学習を柱とし4つの指導実践に限定し事例研究を行う．具体的には，歴史的な分野と野外活動的な分野を2つずつ抽出する．

②歴史的な分野と野外活動的な分野の振り返りカードの集計を行い，表にして個々の実態や興味・関心を把握するとともに評価へとつなげる．また，限定した4つの指導実践の活動場面をVTRに録画し，そのVTRを用いてビデオテープから思い起こさせ振り返りカードに記入させる手法を用いる．

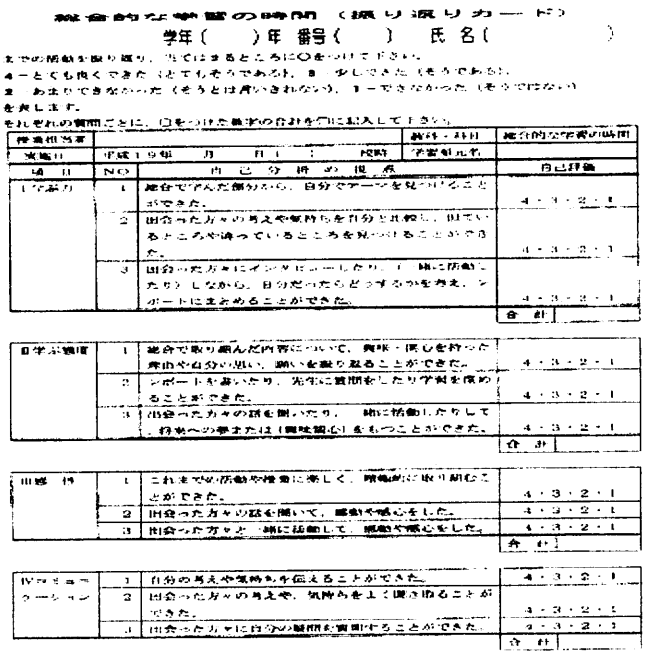
③生徒からのレポート等についても重点を置き，教師側の指導方法の効果的な在り方について探る．

〈振り返りカード〉

総合的な学習の時間の評価[4)]は，評定を中心とした「相対評価」ではなく，観点別学習状況の評価（筆記試験，実技試験，学習ノート，レポートや作品）を基本とする「絶対評価」である．

そのため，評価方法として，「質問紙法」「門答法」「観察記録法」「レポート法」「制作物法」などを重視し個々の評価に反映させなければならない．

本研究では個々の自己評価をカードを通して行い，活動の取り組み（VTR）やレポート（感想文）など総合的に判断して評価の観点を定めた．振り返りカードは，総合的な学習の時間で行った様々な活動を振り返る個人カードである．評価の観点から，個々の自己目標や達成度，自己評価などを記入するカードとして，小川ら[14)]の研究によるものを高校生用にアレンジし考案した．


総合的な学習の時間（振り返りカード）

学年（　）年 番号（　） 氏名（　）

今までの活動を振り返り，当てはまるところに○をつけて下さい。
4－とても良くできた（とてもそうである），3－少しできた（そうである），
2－あまりできなかった（そうとは言いきれない），1－できなかった（そうではない）
を表します。
それぞれの質問ごとに，□をつけた数字の合計を□に記入して下さい。

授業担当者		教科・科目	総合的な学習の時間
実施日	平成19年　月　日（　）　限目	学習単元名	

項目	NO	自己分析の視点	自己評価
I（学ぶ力）	1	総合で学んだ部分から，自分でテーマを見つけることができた。	4・3・2・1
	2	出会った方々の考えや気持ちを自分と比較し，出ているところや違っているところを見つけることができた。	4・3・2・1
	3	出会った方々にインタビューしたり，一緒に活動したりしながら，自分だったらどうするかを考え，レポートにまとめることができた。	4・3・2・1
			合計
II（学ぶ態度）	1	総合で取り組んだ内容について，興味・関心を持った理由や自分の思い，願いを振り返ることができた。	4・3・2・1
	2	レポートを書いたり，先生に質問をしたり学習を深めることができた。	4・3・2・1
	3	出会った方々の話を聞いたり，一緒に活動したりして，将来への夢または（興味関心）をもつことができた。	4・3・2・1
			合計
III（感性）	1	これまでの活動や体験に楽しく，積極的に取り組むことができた。	4・3・2・1
	2	出会った方々の話を聞いて，感動や感心をした。	4・3・2・1
	3	出会った方々と一緒に活動して，感動や感心をした。	4・3・2・1
			合計
IV（コミュニケーション）	1	自分の考えや気持ちを伝えることができた。	4・3・2・1
	2	出会った方々の考えや，気持ちを上手に聞きとることができた。	4・3・2・1
	3	出会った方々に自分の疑問を質問することができた。	4・3・2・1
			合計

〈振り返りカードの見方〉

振り返りカードは，I（学ぶ力），II（学ぶ態度），III（感性），IV（コミュニケーション）の4項目の分野から成る．その項目NO 1～3の質問事項については自己分析の視点である．自己評価は4段階となっている．

授業担当者2名（T1・T2）が協議し個々の自己目標や達成度，自己評価などを記入する個人カードについ

て定義づけを行った．

生徒の達成度として，振り返りカードの１項目が自己評価４段階の合計値９ポイント以上であればその項目について達成したとする．また，各項目Ⅰ（学ぶ力）～Ⅳ（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ）までの自己評価４段階の総合計が 36 ポイント以上であれば，その単元において生徒の興味・関心度があり，達成できたと判断する．

※項目Ⅰの合計値は最大 12，項目Ⅰ～Ⅳの総合計は最大 48 である．

３）調査方法

（１）調査期間

・実態把握：平成 19 年４月～５月

・指導実践の対象期間：平成 19 年６月～８月

・指導実践の対象場面：テント設営（6 月 1 日）
稲子集落伝統こけし（6 月 15 日），
七ヶ宿ダム見学（6 月 22 日），
七ヶ宿ダムﾌﾞﾗｯｸﾊﾞｽ駆除（8 月 22 日）

・振り返りカード記入：中間発表（10 月 26 日）

・レポート（感想文）記入：中間発表（10 月 26 日）

（２）調査の対象

・Ｓ校の「七ヶ宿概論」受講生
２年生（男４），３年生（男１，女２）合計７名

（３）生徒の実態

NO	学年	氏名	性別	生徒の実態
1	2	O．M	男	優しく温和な性格である．社交性に富み，町内の老人ホームでボランティア活動を行う．
2	2	O．R	男	大人しく不器用である．自分の考えを伝えるのが苦手で質問に対する返答に時間がかかる．
3	2	K．S	男	物事を深く考えず気分屋である．積極的な部分と臆病な部分の両面を持っている．
4	2	H．G	男	はっきりした性格で気分屋である．年齢は優れているが度々怒り相手に不快感を与えてしまう．
5	3	K．Y	女	校内では積極的な発言や対話が見られるが校外には出ると自信がなくなり消極的になってしまう．
6	3	T．M	女	主体的で大人しく自分の考えをきちんと表現できる．初対面の人前で話すことができる．
7	3	N．M	男	温和な性格で，物事に関して相手に年齢されやすい．レポートはこなすが積極性に欠ける．

（４）授業実践で求める生徒像

NO	学年	氏名	性別	T1 問H T2 問論	問題・関心	振り返りカードの項目 Ⅰ 学ぶ力	Ⅱ 学ぶ技能	Ⅲ 興味	Ⅳ コミュニケーション
1	2	O．M	男	T1	△	○	△	－	○
				T2	△	○	○	◎	△
2	2	O．R	男	T1	◎	◎	◎	◎	◎
				T2	○	◎	◎	○	◎
3	2	K．S	男	T1	△	◎	○	◎	○
				T2	△	◎	◎	◎	○
4	3	H．G	男	T1	○	◎	△	○	－
				T2	◎	○	○	◎	◎
5	3	K．Y	女	T1	－	◎	△	○	◎
				T2	－	◎	△	◎	○
6	3	T．M	女	T1	△	○	－	－	○
				T2	△	△	－		○
7	3	N．M	男	T1	○	○	○	○	◎
				T2	○	○	○	△	△

※T1：授業，T2：問題による授業実践で求める生徒像の観点（－）必要なし，（△）現状維持，（○）必要，（◎）特に必要

６．総合的な学習の時間「七ヶ宿概論」の指導実践について

総合的な学習の時間は年間計画で約 19 回実施している．その中で，実践場面を歴史的な分野を２つ，野外活動的な分野を２つ抽出し，計４つの指導場面に着目して生徒の興味・関心や指導方法について検証する．また，生徒には，録画した活動場面のビデオテープから思い起こさせて振り返りカードに記入させる手法を用いた．

１）七ヶ宿概論の学習目標

①七ヶ宿町の自然・地理・文化の学習を通して，自らの郷土を愛する心を養うとともに関心を深める．

②様々な野外活動を通して，自然に親しむとともに，規律ある行動と協調性を養う．

③地域調査活動を通して，関心を持ったことを自ら調べ発表する態度を身につける．

２）地域との関連

地域は学習の場である．森や川などの自然や博物館，文化財など現場で本物に触れ調査や体験を行うと同時に，地域の専門家とのかかわり（ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ）を図り社会性の向上をねらった．

〈協力施設〉

①七ヶ宿町水と歴史の館

②国土交通省七ヶ宿ダム管理事務所

③白石市小原験断屋敷

④南蔵王青少年旅行村

⑤みやぎ蔵王七ヶ宿スキー場

３）「七ヶ宿概論」指導実践１，２（歴史的分野）

実践	月	日	学習内容（歴史的分野）
1	6	15	七ヶ宿町稲子集落，伝統こけし見学 こけし職人　大葉　富雄　氏
2	6	22	七ヶ宿ダム見学

（１）指導計画及び学習内容

実践１，２では，歴史的分野について取り組んだ．七ヶ宿町で有名な「こけし」と「七ヶ宿ダム」この二つについて取り上げ，教師側の働き掛けによって単元を大きく膨らませ発展させることをねらった．

〈ｲﾝﾀﾋﾞｭｰの様子〉

感想文を書いている生徒３名を抽出して，実践１，２の振り返りカードを比較し数値の変化について調べた．

３年生を中心としながら，こけし名人の大葉さんにインタビューしている場面である．

設問１については３年 T.M が担当した．大葉さんは生徒の質問に対して懇切，丁寧に答えてくれた．

（2）結果

[illegible]

実践	学年	氏名	性別	振り返りカードの項目				合計
			T1（河村） T2（岡崎）	Ⅰ 学ぶ力	Ⅱ 学ぶ態度	Ⅲ 感性	Ⅳ コミュニケーション	合計
③ ②	3	T.M	女	11	10	11	11	43
				12	8	11	7	37
			T1	◎		○	◎	
			T2	△	○	○	◎	
① ②	2	O.M	男	8	7	9	8	32
				9	9	8	8	34
			T1	◎	△	○	◎	
			T2	○	◎	◎	△	
① ③	2	H.G	男	12	9	9	12	42
				12	12	12	12	48
			T1	◎	△	○	○	
			T2	○	◎	◎	◎	

[illegible]

〈評価の観点の結果として〉

①学習活動の中で印象的だった内容について感想文が書かれていた.

②感想文と振り返りカードとを検討してみた結果，感想文を書いた実践において振り返りカードの合計値がいずれも伸びていることが分かった．３年T.M（女）と２年H.G（男）では，それが顕著であり，二つの実践の値に６ポイントの開きがあった.

③教師が実践１でインタビューに指名した生徒２名，３年T.M（女），２年O.M（男）について比較した.

その結果，３年 T.M（女）の方が２年 O.M（男）より，学習活動の中で相手に対して的確な質問ができ，コミュニケーションを多く取ることができた.このことは，振り返りカードの項目ⅠからⅣの数字にはっきりと示されている．２年O.M（男）,２年H.G（男）については，振り返りカードの項目Ⅳ.コミュニケーションの数字に変化は見られなかった.

以上のことから教師側の働き掛けは最も大切であり，その働き掛けによって単元の中にある学習内容が満たされ，その単元にうまく合致した生徒は自信を持ち自立・発展をしていくと考えられる.

4）「七ヶ宿概論」指導実践３，４（野外活動的分野）

実践	月	日	学 習 内 容　(野外活動的分野)
3	6	1	野外体験　青少年旅行村　テント設営 管理人　小関　氏
4	8	31	七ヶ宿ダム ブラックバス駆除

（1）指導計画及び学習内容

実践３，４では，野外活動的分野について取り組んだ.この実践は生徒主導型で計画を立てた．テント設営についてはキャンプに目を向け，将来の余暇活動への発展性を期待しながら学習活動を組み立てた．また，感想文を書いている生徒１名を抽出して，実践３，４の振り返りカードを比較し数値の変化について調べた.

〈活動の様子〉

当日，七ヶ宿ダムでは水位が減少していた．生徒達は足場がぬかるんだ部分をかき分けて釣り場に到着し釣り経験者は自分で準備を行い，未経験者は教師が準備した．この日の釣果は１匹だった．３年K.Y（女）が約20㎝のブラックバスを釣り上げた.

（2）結果

実践４について感想文を書いた３年K　Y（女）の評価の観点

項目	内容	評価の観点
振り返りカード	1項目 12 ／ 9-11 ／ 9以下	◎○△
振り返りカード	合計値 40-48 ／ 36-39	◎／○
振り返りカード	合計値 30-35 ／ 30-35 ／ 29以下	△／△
感想文（振り返りカード）	合計値 36-48 ／ 30-35 ／ 29以下	◎○／△
感想文（振り返りカード）	合計値 40-48 ／ 36-39 30-35 ／ 29以下	◎／○ △／△

実践	学年	氏名	性別	振り返りカードの項目				合計
			T1（河村） T2（岡崎）	Ⅰ 学ぶ力	Ⅱ 学ぶ態度	Ⅲ 感性	Ⅳ コミュニケーション	合計
③ ②	3	K　Y	女	9	9	10	9	37
				12	10	9	8	39
			T1	◎	△	○	◎	
			T2	◎	△	◎	○	

[illegible]

〈評価の観点の結果として〉

①学習活動の中で印象的だった内容について感想文が書かれていた.

②感想文と振り返りカードとを検討してみた結果，感想文を書いた実践において振り返りカードの合計値がいずれも伸びていることが分かった.この結果は，振り返りカードの項目Ⅰ，Ⅱ，Ⅳの数字に表れた.

③K.Y（女）が実践４で数値が上がったのは，ブラックバスを釣り上げ自己の目標が達成されたからである.

以上のことから実践４においても教師側の働き掛けは重要であり体験的な学習を通して興味・関心が生まれ，

生徒自身が発展性を持つという結果となった.

5）抽出生徒以外の検討

実践１～実践４において，生徒４名を抽出し感想文と振り返りカードとの関係，評価の観点，などについて模索した．そこで，七ヶ宿概論を受講している残り３名の生徒について検討する.

抽出した３名の生徒

【２年O.R(男),２年K.S(男),３年N.M(男)】

〈感想文について〉

感想文	活動日	学 習 内 容 （一学期）
3名	5月18日	野外体験　ニジマス釣り体験

（ニジマス釣り体験と実践２との比較）

振り返りカードの各項目が９ポイント以上，総合計が36ポイント以上であれば，興味・関心度があり全体的に達成できたと判断する．

実践の欄(2)は生徒が感想文を書いた実践項目．

実践	学年	名前	性別	振り返りカードの項目 I 学系力	II 学系態度	III 感性	IV コミュニケーション	合計 最大値 48
(2)	2	O．R	男	7	8	8	7	30
				9	8	10	8	35
(2)	2	K．S	男	8	11	9	8	36
				12	9	8	7	36
(2)	3	N．M	男	7	8	9	5	29
				6	7	9	8	29

（1）評価の観点及び考察

今までの学習活動で一番印象に残ったことについて感想を書かせたところ，実践１～４以外で３名の男子生徒が野外活動的分野「ニジマス釣り体験」について感想文を書いていた.

そこで，七ヶ宿概論を受講している残り３名の生徒についても今まで行った評価の観点についての実践結果と同様になるのではないかと思い検証した．その結果を次に示す.

・感想文を書き，振り返りカードの総合計が36ポイント以上ある生徒は３名中，２年K.S（男）１名のみだった.

・振り返りカードの総合計が35ポイントだった生徒が１名いた【２年O.R（男）】.

・振り返りカードで９ポイント以上の項目が２つ以上だった生徒が２名いた【２年O.R（男),２年K.S（男）】.

・３年N.M(男)については，振り返りカードの項目で９ポイント以上の項目はⅢ．感性のみだった．また，総合計は29ポイントとなり低い達成度となった.

全体的に，感想文を書き，振り返りカードの総合計が36ポイント以上だった生徒は７名中，５名だった.

以上のことより，感想文と振り返りカードは関係があり，検証の結果，感想文を書いた実践において振り返りカードの合計値が36ポイント以上と高い傾向になることが分かった.

7．結論

学習指導要領の改訂に伴い，平成 15 年から高等学校の教育課程の中に「総合的な学習の時間」が取り入れられて来た．あれから５年経過し「総合的な学習の時間」というカリキュラムの本質についてやっと見えてきたような感がある．その理由は，教育委員会が「総合的な学習の時間」の研修会や文部科学省からの伝達講習会などを積極的に行っているからである.

教科という枠組みを超えたカリキュラムだからこそ，学校は地域との結び付きをもっと積極的に行う必要がある．少子化が叫ばれている今日，学校の特色を生かすキーワードは地域なのかも知れない.

本研究では，「総合的な学習の時間」についての成果を模索してきた．特にＳ校での取り組みでは，学校を取りまく環境から地域を調べて授業実践を行った．その，授業実践では，歴史的分野と野外活動的分野に着目しながら生徒の興味や関心，自ら学ぶ「生きる力」を探った．その結果，以下のことが明らかになった.

1．振り返りカードは，生徒自身の観点別評価につながり教師と生徒の単元での興味や関心のズレを発見するのに有効であった.

2．授業実践を検証するために，活動場面をＶＴＲに録画して，ビデオテープで生徒に活動場面を思い起こさせて，振り返りカードに記入させた手法は効果的であった．生徒が活躍した単元では，レポート（感想文）が書かれることが多く関心度が高いという結果となった.

3．地域を意識した指導実践１～３では，地域住民とのコミュニケーションをねらった．特に指導実践１では一定の成果があり各々の自己評価につながった.

4．実践１～４では，教師側の働き掛けが必ずしも生徒達の興味や関心を引き出すとは限らないということが，実践１の振り返りカードの分析結果で明らかになった.

5．一つの単元について，深く掘り下げて学習する手法よりも，浅く広く学習し，体験や経験の幅を広げる手法の方が少人数で学習する場合には効果的であった.

これらの結果から，教師側の働き掛けも大切であるが，最も大切なことは，生徒が自ら課題を発見して自信を持ち自立・発展をしていくことである．そのためには，教師自身が幅広い知識と教養を身に付ける必要があり，学校周辺の環境，学校の規模，生徒数，などの側面を考えながら「総合的な学習の時間」の授業の展開を臨機応変に対応する必要がある.

8．今後の課題（次年度へ向けて）

毎年，学習内容に変化を加えながら授業実践を展開していく中で，生徒達から学んだり，一緒に共感したりという場面が多くあった．本校の「総合的な学習の時間」は少人数で個々の生徒に目が行き届き，生徒のニーズに合った学習活動ができる．当初から不安だった女子生徒は，活動をしていく中でかなり興味を持ち始め，活動計画の段階で自分のアイディアを積極的に出すように成長していった．

文化祭では今までの活動を模造紙にまとめて展示発表を行うことができた．生徒達は，校外に出て教師以外の人と接して行くことにより徐々に社会性や自然に対する適応力を身に付けていった．特に青少年旅行村でのテント設営の場面では，将来，自分達でキャンプを行うという意識を持たせて活動に移した．何もしないで様子を伺っていた生徒はやっと自分の役割に気付きテント設営を手伝った．生徒達の学校では見られない素直で生き生きとした姿を見ることができた．

〈文化祭前日の様子〉

以上のような状況から，次年度に向けて．

- 生徒のレポート（感想文）が多く書かれた学習活動は継続して取り入れる．
- 振り返りカードを最大限に活用する．
- 地域の外部講師を増やし，学校へ来校し講義を頂く．
- 地域行事にボランティアで参加する．
- 状況によっての行程の変更は全然問題ない．
- 野外活動では，安全に，かつみんなが楽しめるようにするため下見や計画は最も重要である．
- 様々な分野の体験学習を継続的に行い，研究を進めることで成果が現れる．
- 「総合的な学習の時間」の成果について追跡調査をする必要がある．具体的には，卒業後に「総合的な学習の時間」で扱った分野が，休日や余暇活動に取り入れられているかどうかという部分の調査が次年度の研究課題である．

生徒達はよく外見で判断され悪い印象を与えてしまいがちだが，自分から進んで挨拶したり，尋ねたりといったことができるようになってきたことで，地域の人々からは好感を持たれるようになったことは大きな進歩であった．

人口約 2,000 人の町に立地している小規模な高校である以上，生徒達も地域から親しまれるようでありたい．

9．引用・参考文献

1）千葉英一（2004）宮城県教育研修センター　紀要

2）平成 15 年国立教育政策研究所教育課程研究ｾﾝﾀｰ（2003）『総合的な学習の時間実践事例集（高等学校編）（小等学校編）』　ぎょうせい

3）稲継昌毅（2006）宮城県教育研修センター進路指導研究グループ（共同研究）『自己を生かし，よりよい人生を創造する力をはぐくむ「みやぎキャリア教育プラン」』1.4.1 進路指導とキャリア教育

4）伊平保夫（1996）『高等学校指導要録・調査書通知票推薦書の記入文例』　文教書院　pp.72-102.

5）文部科学省（2006）「高等学校学習指導要領解説総則編」　p.240

6）文部科学省（2007）「高等学校学習指導要領」pp.8-10.

7）文部科学省（2007）「高等学校学習指導要領」「第 10 節体育」　pp.364-368.

8）文部科学省：Ⅰ「総合的な学習の時間」の今日まで　2「総合的な学習の時間」の創設（文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/020501.htm）

9）文部省（1992）「キャリア発達」中学校・高等学校進路指導　資料第１分冊

10）文部省（1999）「高等学校学習指導要領解説総則編」pp. 3 ,135.

11）宮城県教育研修センター（2007）「平成 19 年度中・高総合的な学習の時間研修会（コーディネーター養成講座）研究協議会資料」

12）中西　純（2002）「健康教育における野外活動の現代的意義」　教職研修

13）中野重人（1999）「学習指導要領はこう変わった」日本教育評価研究会『指導と評価』第 99 号. pp. 4 - 8 .

14）小川哲男（2006）『評価で完結！総合的な学習』東洋館出版社

15）志水宏吉（2006）「学力を育てる」『カリキュラム改革をめぐる二つの極め』岩波新書. p.28

16）須藤博之（2007）「平成 19 年度中・高総合的な学習の時間研修会発表資料」

17）田村　学（2006）「総合的な学習の時間における読解力の育成」　初等教育資料 pp.34-36.

18）山尾健一（2007）『「総合的な学習の時間をコーディネートする」－発想法を活用した課題解決設定の手法－』 宮城県教育研修センター発表資料